

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18611006

研究課題名（和文） 大学生に対する教育成果に教育評価のあり方が与える影響

研究課題名（英文） Influence of the Evaluation Method on Education Results on University Students

研究代表者

矢部 正之（YABE MASAYUKI）

信州大学・全学教育機構・教授

研究者番号：18611006

研究分野：高等教育

科研費の分科・細目：時限付細目 大学改革・評価

キーワード：大学教育改革，ICT 活用教育，教育系心理学，教育学，学び，コンピュータ利用教育，教育工学

1. 研究計画の概要

教育効果の向上に資する ICT（情報通信技術）を活用した教育方法および教育評価方法を提案することによって、大学教育改革に貢献することを目的としている。ポイントは2つで、1つは教育評価が教育成果に与える影響に関するプロセスの検証、もう1つは国内外の大学での成績評価制度改革の実態把握である。

- 前者では、教育評価のあり方が大学教育の教育成果に影響するプロセスを解明する。本研究では特に、ICT を利用した形成的評価に注目する。形成的評価は、学生に自分の理解度や学習方法を見直す機会を与え、効果的な学習方略の使用と学習習慣作りを促すと考えられる。採点や成績集計の自動化、即時フィードバックが可能になる ICT を利用した形成的評価の有効性を詳しく実証する。さらに、ICT 活用教育の大学経営的な有効性の証左を得る。
- 後者では、国内外で実施されている大学全体での成績評価制度の改変が、学生の学習にどのような影響を与えているかについて調査し、大学の成績評価改革によって実際の授業での学生の学びがどのように変化したのか、実態を把握する。

2. 研究の進捗状況

- ①成績評価が厳しいと学生が認識している

授業と甘いと学生が認識している授業における学生の学習行動や学習成果について調査を行った。学年による違いが見られ、2年生以上では成績評価が厳しい授業の学習成果が高く評価される傾向があったのに対して、1年生では成績評価の違いによる影響が見られなかった。

このことから、初年次学生は「大学の学習成果」についてまだ十分な認識を持っていない可能性があることが示唆され、初年次学生に対する教育の在り方（各大学の教育目標の理解など）を検討する上での示唆を得た。

②形成的評価の実施状況と学生が自覚する学習成果の間には相関関係が見られなかった。ただしこのことは、形成的評価そのものの価値を否定するものではないと考えられる。

形成的評価が与える影響は、学習成果に直接反映するものというよりも学習動機のような学生の感情的側面である可能性などが考えられ、今後検討する余地のある部分である。

③日本国内の大学における単位制度の運用状況について調査を行った。学生の自習を支援する体制については、整備が進みつつある現状が示された。特に e-Learning を活用した取組が幅広く行われていた。また、GPA 制度と履修登録単位数の上限設定を実施した後には学生の学習時間が増えたという大学では、シラバスへの自習支援情報の明示などの自習支援策をより多くの組み合わせで実施

していることも示された。このことから、単位制度に関わる諸施策は個別に導入するのではなく、学習目標を明確設定した上で、学生の学習を支援するための取組を体系的に整備していくことが必要であることが示唆された。

④ICTを利用した形成的評価に関する具体的取組については、本研究の従事者（矢部他）に加え、平成18年度に採択された文部科学省現代GP「自ら学び、学び続ける人材育成の基盤形成」に関連した信州大学の「教育の質保証プロジェクト」に参加しこれらの目的に沿ったコンテンツを開発している教員の協力も得て、教材作成とその効果および効率の検証を行った。これらの検証内容については、同GPの報告書やこれらの取組成果の一部を盛ったコンピュータ利用教育関連の図書「学びとコンピュータ・ハンドブック」第3章（矢部が編集を担当）を発行したほかは、学会・研究会等における口頭発表に留まっている。平成21年度中に、これらを取りまとめて論文として発表する予定である。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している

(理由)

4年の研究計画の3年目までの進行状況としては、ほとんどの項目で、その成果をまとめる段階まで到達している。ICT活用の効果・効率に関する検証が、十分な学術的な成果を得るまでには至っていないものの、必要な情報・データは収集されている。今後、これら各項目を取りまとめ、総括することで、所期の目的を達成することが予想される。これにより、本研究はおおむね順調に進展していると自己評価する。

4. 今後の研究の推進方策

①成績評価の難易度と形成的評価の実施状況が学生の学習に与える影響について、学習方略に関する分析が十分なされていないので、最終年度にこれを取りまとめる。

② 学習の評価（アセスメント）のあり方について、それを研究する方法の在り方も含めて検討する。特に、イギリスで広がっている **assessment for learning** (assessment of learning とは明確に区別する) の動きや、アメリカで広がっている大学教育のアセスメントの動きなどを視野に入れて、今後日本における学習の評価の在り方について検討をする。必要に応じて、国内大学の訪問調査を行う。

③ICTを利用した形成的評価の効果や効率について、十分に詳細な学術的分析がなされていないため、最終年度にこれらを取りまとめて発表する予定である。さらに、ICT活用教育の大学経営的な有効性の実証については、前出の図書「学びとコンピュータ・ハンドブック」で言及したものの、本格的な果実を得るには、その持続的発展性など実践面での課題が残っている。前出の現代GPでの取組成果を活かすとともに、これらの課題の解決策を探ることで、具体的な教育改革につなげ、さらなる改革に向けた研究へと発展させる予定である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3件)

① 西垣順子, 矢部正之, 「成績評価の難易度と形成的評価が受講生の学習に与える影響：初年次学生と上回生での比較」, 『大学教育学会誌』, 第30巻2号通巻58号, 113-119, 2008, 査読有

② 西垣順子, 「成績評価の何をどのように検討すべきなのか」, 大阪市立大学 大学教育研究センター紀要『大学教育』, 第4巻, 1-12, 2007, 査読有

[学会発表] (計 5件)

① 西垣順子, 矢部正之, 「学生の自主学習を促す仕組みとしての単位制度の運用状況—国内大学質問紙調査報告から—」, 第15回大学教育研究フォーラム (個人研究発表), 2009. 3. 21, 京都大学

② NISHIGAKI, J. and YABE, M., “How Does Formative Evaluation Contribute to Successful and Effective Learning?”, *Improving University Teaching* 2008, 2008. 7. 31, Glasgow (Scotland)

③ 西垣順子, 矢部正之, 「成績評価の難易度と形成的評価が受講生の学習に与える影響2」, 大学教育学会第30回大会 (自由研究発表), 2008. 6. 9, 目白大学

[図書] (計 1件)

① CIEC (コンピュータ利用教育協議会) 編, 矢部正之 編集執筆 (第3章を分担), 「第3章 コンピュータ利用教育」, 『学びとコンピュータ・ハンドブック』 (東京電機大学出版局), 2008, pp89-113